

第3回高等学校改革プラン推進委員会（第二推進委員会）議事録

- 1 日時 平成17年7月3日（日）午後2時00分～午後5時00分まで
- 2 場所 長野県上田合同庁舎 講堂
- 3 出席委員

飯島 俊勝委員長	荻原 拓次委員
佐藤 元太郎副委員長	宮阪 義彦委員
芹澤 勤委員	滝澤 清登委員
遠山 順孝委員	中沢 裕委員
小林 将喜委員	西村 廣一委員
太田 節委員	市川 久由委員
和泉 硯也委員	原 貞次郎委員

4 開会

（飯島委員長）

それでは、委員の皆さまが全員おそろいですから、予定の時間より早めですが始めさせていただきます。よろしいでしょうか。

（全員）

はい。

（飯島委員長）

始めさせていただきます。

では、事務局からお願いいたします。

（植松主任教育支援主事）

委員の皆さん、お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。それではただいまより、委員長のほうから議事を進めていただければと思います。

よろしくお願いいたします。

（飯島委員長）

皆さん、こんにちは。

高等学校改革プランの第二推進委員会の第3回目の会合を、ただいまから開催させていただきます。委員の皆さんにお決めいただいた、日曜日という決定事項ではありますが、毎回、毎回日曜日にご足労いただきありがとうございます。

それではただいまから、第3回の委員会を開催させていただきます。よろしくお願いいたします。それでは、座って進行させていただきます。

委員の皆さん、ご案内のように6月24日、教育委員会の臨時会において、推進委員会に示す資料として、県立高校再編成整備候補案が出され、資料として示されました。第1通

学区、第 3、第 4 通学区は、候補案発表後に、委員会が開かれているわけです。この第 2 通学区におきましては、よかったのか、また悪かったのかは別としまして、その発表前に委員会が 1 回開かれていました。それにつきましては、そのいきさつ状況について事務局のほうから説明をしてもらいます。

（米澤教育次長）

皆さま、お忙しいところご苦労さまでございます。

教育次長の米澤修一と申します、よろしくお願いいたします。

それでは、今、飯島委員長さんのほうからご指摘がございました、先日 6 月 19 日にこの第二推進委員会では 2 回目の会議がありましたけど、現在議会中でございますが、その辺の流れまで私のほうから、かいつまんでご報告をさせていただきます。

ちょっと振り返らせていただきますと、5 月 13 日の金曜日定例教育委員会がございまして、このときに具体的資料をということでご指示をいただいたわけでございます。5 月 29 日に、ご承知のように第 1 回の推進委員会を開催させていただいて、総会と各推進委員会を開いていただきました。6 月 14 日に定例教育委員会を開催させていただきまして、その具体的な資料の中で、2 つの資料、すなわち「学校別の在籍生徒数の推移」と、「高校再編整備に係わる魅力づくり例」というものを配布させていただいたわけでございます。

6 月 19 日に、この第二推進委員会では、その流れをくみまして 2 回目の会議を開いていただきまして、魅力づくりについての具体的な検討に入っていただき、特に塩尻志学館高校の総合学科について、一緒に検討させていただいたということでございます。その間、それぞれの学校、また市町村等から、具体的な学校存続に関する意見書、または校名を出さないでというような意見書、陳情書というものをいただいてきておりました。その数は、ほぼ 40 件近い数を私どもはいただいてきたわけです。

その中で、推進委員会がこういう動きの中で、それぞれの推進委員の方々が議論しにくくなるのではないかという危惧（きぐ）もあったりする中で、何らかの具体的なたたき台を我々のところから資料としてお出しすることが必要ではないかと。推進委員会の審議、議論が進展することを期待して提示する必要があるという気持ちの中から、6 月 24 日の金曜日に教育委員会の臨時会を開催させていただきまして、2 つの資料、すなわち「定時制高校の再編整備にあたって」と、「県立高校再編整備候補案」というものを公表させていただきました。

それを受けまして、翌 6 月 25 日の土曜日には第一推進委員会、第 1 区ですね。それから 26 日の日曜日には第四推進委員会、27 日の月曜日には第三推進委員会と、3 つの推進委員会がそれぞれ開かれたわけでございます。その中では、具体的な賛否両論両方ございましたので、紹介させていただきたいと思います。6 月 25 日の第一推進委員会の中では、こんな意見がございました。賛否両方とも紹介させていただきます。

「何もない状態では、推進委員会では議論できない。提示の時期が早いという感はあるが、教育委員会が責任を持って候補案を出したことは一定の評価ができる」、「具体的な名前を出してもらって、議論せざるを得ない。候補案を出してもらってよかった。これで具体的に議論に入れる」、「候補案を出すことは前回の教育委員会で、すでに予告されていたことである」というような意見、それから「まだ、ほとんど議論をしていなかったのに校

名を出したのはまずい。候補案を公表したことに疑問があるし、白紙撤回をしてほしい」というようなご意見等がございました。

翌 26 日の第四推進委員会の様子でございます。「研究を重ねた上での候補案提示であるので、教育委員会の覚悟を感じた」、「教育の質を上げながら再編を考えていくことが必要である。校名をたたき台として理解し、与えられた中でどのように質を向上させていくかということを考えていかなければならない」、「たたき台として理解し、これを踏まえて、魅力ある学校づくりの議論をしていく」、「地域、生徒や保護者にとって魅力ある学校とは何かという議論が必要なのに、候補案が出たということで魅力ある議論が吹き飛んでしまう。もっと慎重に進めなければいけない」、「候補案を出さないと議論が進まないとのことだが、出たことで動けなくなった部分もある」、そんなようなご意見でございました。

翌 27 日月曜日、第三通学区の推進委員会でございます。「高校再編整備に関して、この委員会でしっかりした指針を出していきたい。そのために今回教育委員会が案を出したのは評価できる」、「推進委員会が具体的な名前を出して議論することは、なかなか難しいので、たたき台を出してもらうことは非常にありがたい」、「いくらたたき台といっても、魅力ある学校づくりをなおざりにして、一方的に候補案を出したことは大変遺憾である。白紙撤回すべきである」というような、それぞれ賛否両論が出たわけでございます。

しかしながら、各推進委員会の総意といたしましては、そのあと具体的なそれぞれの魅力づくり、すなわち総合学科、多部制・単位制等の具体的な検討に入っているところもあり、総意としては、その推進委員会を進展させるという意味をそれぞれ確認していただいたように思います。たたき台として、会を進行していくということを、それぞれの推進委員会では決めて、次の会議の予定を組んでいただきました。

6 月 28 日のから、県会是一般質問に入りました。さまざまな議員の皆さまからのご質問がありました。この時期はおかしいではないかというようなご質問に対しては、先ほどの説明をさせていただいたところであります。白紙撤回についてのご質問がありました。私どものほうでは、撤回するつもりはないという回答をさせていただきました。

またこれまで 2 人の議員さんには、この時期に出したことを評価するという賛成の発言もいただきました。

そんな流れをもちまして、今日第二推進委員会では 3 回目ということで、前回の流れでは、魅力づくりということのひとつの検討として多部制・単位制などを中心に検討をしていただくという流れになってきたところでございます。

以上、概括的に申し上げさせていただきましたので、議論の参考にしていただければと思います。

よろしくお願いいたします。

(飯島委員長)

ありがとうございました。

それでは、今日 1 日の日程を概略させていただきます。ご案内のように 17 時までの日程ということでございます。途中で会の進行状況によって、少し休憩を取りたいと思います。なお、前回と同じように、終わりの時間は議論がどのように進展しようと時間正確に終わりたいと、思っております。ご協力をお願いしたいと思います。

それでは、今、米澤教育次長のほうから説明があったわけですが、この件に関する質問等は、またあとでいただくこととしまして、今日は資料をお配りいただいております。

その資料の説明を、お願いしたいと思います。

4 資料説明

植松主任教育支援主事から資料説明 【説明内容省略】

6 議事

（飯島委員長）

はい、ありがとうございました。

それでは、先ほどの説明から始まって今の資料のところまで質疑応答に入りたいと思います。どうぞ、お出してください。

（中沢委員）

6月14日に、非公開で教育委員会が開かれて、そこで具体的な学校名を挙げたのがつくられたと。そのときに、新聞の報道を見ますと、宮澤委員長さんとして、論議が深まった段階で校名を挙げる。ただいつかということは、そこでは明示されなかったのですが、論議が十分深まってからということを受けて、6月の24日、10日後に具体的な高校名を挙げて発表した。その10日間で十分に論議が深まったかどうか、その辺が私としては疑問に思いました。

そこをどのように事務局等では考えられたのか、またその間にどのくらいの実際の推進委員会が持たれて、どのような意見が出されたのか、その辺が分かりませんので教えていただけますか。

（飯島委員長）

どうでしょうか。

その辺のところは、いろいろ報道はされておりますが、実際に委員会は開かれております。けれど、短期間にどうして変わってしまったのかというご質問だろうと思います。

（吉江高校教育課長）

高校教育課長の吉江と申します。

今ちょっとご質問いただきましたので、お答えさせていただきたいと思います。25日以降、いろいろ報道されまして、26日、27日と経過する中で、この前の火曜日から議会が始まりまして、いろいろな議論をいただく中で、ちょうどいま中沢委員さんからご質問いただいたようなご質問もいただいているわけですが、若干申し上げたいと思っております。

14日に非公開で審議いたしました。これで、今回の議論につきましては、24日にも非公開でいたしましたので、それにつきましては実は14日のあと、こちらの第二推進委員会におきましても若干ご意見が出たところでございますが、それは省かせていただくとしまして、14日の議論の中で、非常にいろいろな意見が出る中で、ここの時点で決めるには、

もうちょっと時間が必要かなというような判断がある中で、次回以降に送ったということでございます。

ですからこの時点におきまして、必ずしも全く議論ができないような状況のものであったという状況では当然ないわけではございません。実は、県教育委員会の定例会というのは、7月8日に予定されていましたが、ほかの案件もございまして、6月の24日に開催するような運びになりましたので、その日は14日に審議した続きということで、継続的審議をしていただきました。

それでその中で、最終的にこの時点で、この内容で出していいだろうというような判断をちょうだいしまして、その日に公表したという次第でございます。それにつきまして申し上げますと、非公開の関係につきまして申し上げますと、いろいろ批判という意味での議論が出ていますが、まず非公開にした理由をあらためて申し上げますと、私どもの教育委員会の定例会のやり方では、その日に審議する場合に、公開で審議する場合は、常に書類というようなものを前もってマスコミや報道機関に出してしまいます。それで出した内容を議論いたしますので、内容が仮に変わったり、あるいはこの内容を本日決まったとして、本日出さずに、例えば1週間後、10日後、あるいは1カ月後に出そうというようなことを決めたとしても、もうその時点では間に合いません。

そんなこともございまして、まず委員長をはじめ、各委員のご判断をいただいた上で非公開にさせていただいて、それで議論した次第でございます。それで最終的に、内容およびその日に公開するというでいいのではないかなというようなご判断をいただきましたので、公開の場に移させていただいて、先ほど担当の支援主事のほうからご説明しました資料に基づいて説明なり質疑を受けまして、その上で公開したというような次第でございます。

そんなことで、あえて結果的には6月24日ということで、まさに開催されております県議会におきまして、非常に議論が煮詰まるといいますか、非常に議論が沸き立つというようなものを、委員長さんをはじめ委員も、もうこういう時期であると。それが大変議論になると承知の上で、この機会に公表することと判断したという内容でございますのでよろしくお願いいたします。

(中沢委員)

そうすると、論議が十分深まったととらえていたわけですね。どうもそこが、私としては納得できないところなのです。

(吉江高校教育課長)

先ほども申し上げましたように、14日にはこの時点で、出すにはまだ若干いろいろあるのではないかなというような判断の中で、次回にもう1回審議しようということで、その委員会が6月24日になったものですから、その時点で再度ご審議いただいて、その内容でいいという判断の中でお出したということでございます。

(飯島委員長)

その件につきましては、よろしいですか。

(遠山委員)

この問題はちょっと、私はうのみができない問題。内容が良い悪いではないです。私も14日の非公開のときに、傍聴に行きました。非公開だったら、そういうこともあり得るだろうということで、それは一定の理解は持ちました。何を言っても、そういうわけにいかないだろうということで、大勢で行きましたが、ただ行ったきりで帰ってきました。

まず、公開する前に当然この会議内には出ると思うからね。公開する前に。この推進委員会をつくったからには、推進委員会を立てて公開をすべきではないかと、私はそう思っていました。24日になって突然臨時会を開くなんて、誰が知っていましたか。ほとんど知らないです。

これはインターネットでパッとやっただけで、インターネットは見なかったから分からない。そういう中で、教育委員会が開かれたわけ。それで委員長も、「早く示せ」って。ここにいる方も、それはそこで働いているからしょうがないけど、「1日も早く示せ」って。「早く、言え、公開してしまえ」という命令によって、私は動いたと思います。

6月27日に、地域高校を抱える町村長の会というのがあって、私はそのときに委員長の認識が全然違うと思いました。もう教育なんて考えていないね。本当の教育というものを見ていない。ただ、工場を動かすみたいに、合理的に動かすことばかり考えているから、委員長もここへ来てもらって、徹底的にやるじゃないかという経緯があるんです。町村長の会は、そのことには触れなかった。

そんなことで、公開が行われたわけだけど、これは内容は良い悪いではありません。ただ私は、大きく見た場合に地域高校に、本当にしわ寄せが行っている。だからほとんどは地域高校にしわ寄せが行って、そしてあの波長に乗って、地元の筋とすればこの会ぐらいにはかけて、そしてぼつぼつこんな話があると。ここに見えている、こういう人たちにも大体分かってきて、こんな話し合ったほうがいいという中で、だんだん浸透させていくのが本当だと思います。この筋を外してやったら、非常に在校生や地域に与える影響というのは、非常に大きいですね。つぶされる学校の生徒になってみなさい。これは非常に、私は衝撃が大きいと思います。その地域の影響って、非常に大きいと思うんです。

だから、こういう問題については、ある程度推進委員会をつくったからには、出してやるべきだったと、今あらためてそう思います。なかなかこういうのを出してしまうと、消せません。これはいったんこういう方向が出ると、それを消してやり直すなんてことは、難しい問題になってくると思いますね。片方消せば、片方立たずで、それだから重要なんです。また発表するかが。いかに発表が重要なのだということを、私は申し上げてこんなふう思うわけです。

それからもうひとつ、これは今確かに、どんどん生徒が減ることは間違いない。減っています。中には、そんなに減ってはいないという人もいますね。私は計算したことはないですが、この改革によってどのくらい県は合理化されて、教育費がどのくらいあって、どのくらい経費の削減になるのか、教育の効果が高まるのか、そういう説明を私どもは聞かせてもらえないまま、「あの学校はどうしろ」、「この学校はどうしろ」という格好になっているわけですね。

これは魅力ある高校なんて言っている時間はないですよ。本当に魅力ある学校にすること、その学校があってこそ魅力ある高校を目指していける、頑張れるのです。学

校がなくなってしまったところは、なかなかこんなわけにいかないね。だから私は、この発表は、発表自体は、内容はともかくとして、これから検討するにしても、えらい拙速で、早すぎたね。もう少し検討すべきではなかったかと、こういうふうに私は考えます。

以上です。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

（原 委員）

私は、内容については後ほど幾点にもわたって質問させていただきますが、その前に昨日の新聞報道によりますと、一昨日7月1日の県会の一般質問で、教育長職務代理者の松澤さんが、このように答弁されているのを見て驚きました。新聞報道ですから、そのことについて説明していただきなのですが、仮に多部制・単位制高校を設置しない場合、定時制は現状どおりだが、4校を減ずると。多部制・単位制を設置しない場合は、4校を減ずると。たたき台と称して6月24日に公表し、その1週間の間にもうすでにたたき台とは違うことを、教育委員会の最高責任者が述べている。こういうことになれば、また1週間もしたら、また総合学科についてはどうのこうのとか、そうなるのでしょうか。たたき台たり得ないと、まず思います。その点について、まず最初に質問をさせていただきます。

（吉江高校教育課長）

昨日のある新聞で、そういうような報道が確かに出されております。それでその前の日に、一般質問におきまして、ある県会議員から、仮に多部制・単位制高校が設置されないというような選択肢になった場合はどうなるのかというようなご質問に答えるということでお答えしたのが、今の委員さんのほうからお話しいただいた内容です。

その考え方の、言ってしまいますと私どもの当初の、原理原則を述べさせていただいたまでのことということでご理解いただきたいと思います。私どもは従来から、全日制につきましては14校を減にするということは、かねてより申し上げております。ですから委員さん方にお配りしている資料の中にも14校が減というものが出てまいるかと思っています。ただしかしながら14校を減らしつつ、今後は広い意味で先ほどご説明がございましたように、いわゆる地域の皆さまの社会教育的なサイド、総合教育的なサイドを組み入れた意味での多部制・単位制高校というようなものを設置していったらいかがかということで、その14校のうちの4校を多部制・単位制というような位置付けで残していこうと、減る感じで残していこうという案でございまして、その案に基づいて5月の13日の定例会では数を決めていただきましたし、また6月の24日の臨時会におきましては、私どもが具体的に今後検討をいただく材料としまして、校名もお出しさせていただいた次第です。

しかしながらそのような質問がありましたので、そういうような場合であれば、仮に多部制・単位制が当然なくなるということになるとすれば、もちろん私どもはそれを想定しているわけではございません。仮になくるとすれば、そのような議論になるのではないかということをお答えした限りだということでご理解いただきたいと思います。

(原 委員)

そうすると今、原理原則、つまり原理原則は何が何でも14校減るのだと、こういうお答えですね。そこを確認させていただきます。

(吉江高校教育課長)

私どもが、5月13日の教育委員会定例会におきまして、ご審議いただいた結果、お出しした内容というのは、最終報告の中にある結果的には5.5学級というようなものをベースに考えた場合の76校というようなベースを、それぞれの地域に当てはめさせていただいて、それで76校ということは、今の、長野市立高校を含めると90校という、数から対しますと14校減ということになるので、それをベースに考えていただきたいということでございますから、それをベースにしたということでございます。

(飯島委員長)

ありがとうございました。

ほかにございますか。

(荻原委員)

総合学科の話なのですが、諮問というか報告では1校以上という格好になっておりまして、県側も相当、その総合学科に期待をしているのではないかとということが、前回の委員会の志学館の高校の話で。そういう中で、4通学区にそれぞれ1校ずつなわけですね。どうして1校以上を設定したのかということが第1点と、それから特にこの第2通学区で見ますと、職業科のある学校は、資料を見させていただくといろいろな学科の再編をずっとやってきていますね。そういうことで、生き残ったのかと。あるいは普通高校では、コース制を採用したところが、生き残ったという言い方は悪いですが、選択から漏れていると。特に野沢南の場合には、普通高校もコース制も、今のところないわけですね。望月高校については、平成15年からですか。そういった意味では、コース制を取ったところは、よくやったという教育委員会の評価なのか、あるいは職業科は生き残りを懸けて皆さん、その努力をされて、いろいろな学科再編を行ったから残ったのかと、私の素朴な疑問もあります。

それで総合学科が1校以上ということで、丸子という候補が挙がっていますが、これは具体的な理由としては、2校にならなかったのは予算がないのか、教育費がないのか。その辺も含めて質問させてください。

(飯島委員長)

はい、吉江課長。

(吉江高校教育課長)

まず1点目の総合学科の関係でございますが、総合学科につきましては、最終報告の中にも確かに1校以上というような記載をされています。その中で、確か前回のこちらのほうの委員会の中でも、「1校以上なのだからもっといっぱいあったらどうか」というよう

なお話もあったかと思います。ほかのところでも、そのようなお話も若干なりございます。それで、ただ私どもは、現時点におきまして、権利というものではなくて、取りあえず1校で立ち上げて、それで非常に内容的によければ2校以上に今後さらに増やしていくという考えはもちろん持っております。

ただ総合学科も、ある程度以上数ができると、果たしてそこに集まる生徒さんが、どういう状況になってくるのかというようなことを考えた場合に、それぞれの通学区に総合学科は例えば1校で、それ以外の学校としては、こういう学校、こういう学校というようなことで、配置したほうが当面はいいのかなという考えの中から、1校ずつでいかがかというようなご提案をさせていただいている次第でございます。

しかしながら、この時期で考えた場合、ここも例えば総合学科のほうがいいのではないかというような選択肢があれば、それは議論を当然ながらいただきたいと思っております。それと、今お話がございまして、また先ほども遠山委員さんからもお話がございましたが、いわゆる定時のお話。実は私ども基本的には、活力のある高校づくりというようなものをベースに考えているわけですが、どうしてもほかの地域からも定時のお話には言及されてまいります。今回の私どもの報告書自体も、ある意味で国家財政、あるいは都道府県財政を考えた場合の議論も出てまいりまして、具体的には第1通学区でも資料を求められておりますし、また第3通学区においては具体的にそういう議論をしたいというお話もございます。

今回はちょっと間に合わなくていけません、何らかの形で次回以降、そういうようなものについても、委員さん方がいろいろ考えていただけるような資料をご用意させていただきたいと思っております。

先ほど遠山委員さんからもお話が出ましたところもありますが、それぞれの地域につきまして、実はある意味、私どもは全体的には必ずしも地域高校というものを、単に育てるということは残念ながらないと思っています。ただ、そういうような面もあるというようなご批判も受けてしまって、そういう意味では若干私どもも、基本的には生徒さんの通学の足を、まず第一に確保するという前提で考えていくという前提で考えていくということとはご理解いただきたく、またさらに、それぞれの地域におきまして、やはりこれからのいわゆるキャリア教育と申しますか、そういうものの必要性というものを考えておりまして、そんなことから各通学区における、専門高校と普通高校の位置付けなどをいろいろ考えた上での内容が今回のものでありまして、単に例えばコース制が導入された、されないというような趣旨からの選択ではないということでご理解いただきたいと思います。

(荻原委員)

高校再編というのを17年でやって、31年でもう1回やるというのが前提みたいな格好になっていますね。そうした場合には、17年度やって総合学科、あるいは多部制・単位制をつくる、1校ずつつくるということで、それで3年たって卒業生を送り出して、また評価してやっていくということになると、あと14年でもう1回再編するには、何かとても不十分な気がしますね。そういう意味では、理想というか、子どもたち、あるいは親の負担を考えれば、ここ旧5、6区に1校ずつというのが納得できる、誰もが納得できるか分かりませんが、利便性とか通学とか、その辺を考えると、そういうのが妥当ではないかと思

いますが、どうしてそういうことを考えられないのかなというのが、今までの学区制等を見ればどうなのかなと、もう1回その辺をお知らせください。

（吉江高校教育課長）

1点まずお答えしたい点がありますのは、5月29日の第1回の推進委員会の折にも、私が申しあげましたように、この今回の検討といいますか、それに基づいてのひとつの計画というものが出来上がったとして、これが恐らく20年、30年もつものだとは当然ながら考えていませんで、今お話がございましたように、10年以上先に見直しをしなければいけない時期があると思っております。

ただ、まず今お話のありました、総合学科高校につきましては、今回このような形で改革プランというようなものを策定して、またそれに基づいてこうやって推進委員の皆さんに議論をいただいた上で、実施計画をつくって、その上でつくっていくという位置付けでなくても、総合学科の場合には、恐らく今後必要性があればできるのかなと思います。

そう言いますのは、これはもちろん県民の皆さんのご理解をいただきながら、あるいは県議会のご理解いただきながらということになりますが、例えば塩尻志学館高校を平成12年に総合学科にいたしました。その塩尻志学館高校を総合学科にした折には、そのような全県的な検討とか、そういうようなことを経て決定したのではなく、当時は教育委員会の判断の中でさせていただいた経過がございます。

そういう意味では今後10年先、15年先の、新たな今回仮にできたとする計画の見直し時でなければいけないというようなものではないかとも考えます。それが1点です。

それともうひとつは、総合学科につきましては私どもとしましては、非常にシステム的によく動いておりますし、また今回は先ほど申しあげました塩尻志学館の例を申しまして、長野県内にもっと増やしたいという気持ちはありますが、ただ反面たくさんできれば、できるほどいいのかということについては、やはりそれについてある程度幾つかの地区でつくった上でよく見てみないと、必ずしも現時点で判断を下してもいいかという懸念が若干ございます。その中で、取りあえず1通学区に1校あたりでいかがかと考えておりますが、先ほども申しあげましたように、例えばこの第2通学区では、「ぜひ2校必要じゃないか」というような議論があるとすれば、それはまたぜひそのような議論をお続けいただきたいと思っている次第でございます。

（飯島委員長）

ありがとうございました。

ほかに、ございませんか。

（中沢委員）

今、総合学科が出たので、関連してよろしいですか。

（飯島委員長）

どうぞ。

(中沢委員)

今、総合学科、設置校のことが出ましたので、それに関連して具体的にこの2ブロックでは丸子実業という形が出ましたが、生徒の足、要するに地理的なことを大事に考えていると先ほどの話にありました。それを考えていくときに、果たして丸子実業高校がいいのかということは、非常に疑問に思います。私もそれを考えたとき、実際佐久方面ではどの辺まで通えるのか。時刻表を調べてみたら、駅から自宅までの距離によっても違うのですが、小海線の中込あたりでやっと始発のディーゼルの電車に乗って、何とか始業に間に合うのかという感じがしますね。

そうするとそれよりも南、あるいは駅から遠い、こういう生徒は実際にもう通うことはできない。どうしてもということになれば、下宿という手もないことはありませんが、できれば基本的には自宅通学だと思います。それを考えたときに、丸子実業を、いろいろな条件でそれらを考えたのだらうと思いますが、地理的な面で見ただけの場合には、非常に限られているかと思ったのです。寮でもつくってくれれば、また別でしょうが、そんなことを思いました。

今の話で、この第2ブロックの中で、1校ではなく将来的に2校つくっていくのだと。そういう見通しがはっきりしていて、まず最初は丸子実業を設定しましょうと。次のときは、今度はもうちょっと佐久より、あるいはもっと離れたところで設定していきましょと、そんな見通しがついていれば、まだいろいろな計画もあるでしょうから、話もまた別でしょうけれども、その辺の見通しがはっきりしていませんので、そういう点でも地理的に偏りがあると思った次第です。

どんなものでしょうか。

(吉江高校教育課長)

私も丸子実業にさせていただきましたが、先ほど冒頭に通学の利便性というようなお話を申し上げましたのは、基本的には再編対象として考えて、学校の場合には考えたということで、もちろん今のお話の総合学科もある程度以上交通の便のいいところというのは、当然生徒さんが集まりやすいという意味では、中沢委員さんがおっしゃるとおりだと思います。

その中で取りあえず私どものほうでは、丸子実業というようにお話を申し上げたわけですが、それにつきましても、先ほど来申し上げておりますように、この通学区において、まず1校つくるとすれば、ここではなくて、こちらのほうがいいのではないかというようなご議論があるとすれば、それはまたいろいろ意見を出していただきたいと思います。

それとは別個に、ぜひ総合学科につきまして非常にいい手、例えばの話ということでお聞きいただきたいと思います。今回は仮に丸子実業で可としたとして、ただ早々に2校目をこちら辺の地域につくったらどうかというようなご報告を、仮にいただくような形もひとつのやり方だと思っています。

私が先ほど来申し上げておりますように、やはりいろいろなタイプの学校というものを、各地域につくるのがまず一番だと考えていますので、直ちに似たタイプのものを複数つくることについてどうかなと若干懸念する中で、取りあえず1校目はいかがかと、現在は長野県教育委員会としては考えているということで、ご理解いただきたいと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございました。

(太田委員)

手続的なことで、もう一度確認させていただきたいのですが、この委員会は何をやるのでしょうか。私は、いわゆる高校教育の質と量の改革、対象となる具体的な学校名も含めて提起できるのなら提起するのだという認識を持って、今、この委員会に臨んでいるわけなのです。

当委員会は、長野県教育委員会の下部組織になっているのですか。この点委員長にどういう見解かお聞きしたいのです。

(飯島委員長)

別に下部組織でも何もなく、私たちは高等学校改革プラン推進委員会の設置要綱に伴って、私たちは教育委員会から委嘱を受けたのですね。その中の所掌事項によって、私たちは審議をし、そして教育委員会に報告を出す。途中経過において、このような動きがあるのに対して、今、説明を求めているということだろうと思います。

(太田委員)

そうしますと、学校名について委員長のほうから事務局のほうへ、公開するよう要請があったわけではないわけですね。

(飯島委員長)

ありません。

(太田委員)

そうしますと、当委員会とか我々委員の役割は何かということになってくると思うのです。一方的に学校名含めた事務局案をそれも個人の自宅へお送りいただいたことは大変、非礼だと思います。

これについていかがでしょう。

(吉江高校教育課長)

1 点目、まず太田委員さんからお話ございましたように、委員会の位置付けということで申し上げますと、これにつきましては、当初の委員会におきましてご説明申し上げましたように、私どもはこの委員会において、魅力ある高校づくりとかあるいは基本的な再編整備に関する具体的な事項、さらには総合学科とか多部制・単位制高校の具体的な議論をいただきたいと。それをいただいた上で、私どもは最終的にいただいた報告書を受けて実施計画を策定していきたいというようなことで、そういうような議論をいただく形ということでお願いしている次第です。

今、お話しいただきましたが、具体的な校名につきまして、確かに教育委員会という委員会の立場でお出しさせていただきました。それについては、今もお話がありましたよう

な形で、もしお取りいただいたのなら大変申し訳なく思っておりますが、基本的に私どもは委員長をはじめ、委員の中でこのような校名を出すことによって、各推進委員会の委員さん方の議論を進めていただくということでございまして、先ほど来申し上げておりますように、この学校名自体がこれで決まりというような位置付けでお出したものではございません。もしそういうようなことでお出しするとすれば、当然ながら実施計画自体を私どもが策定できるという形になってしまいますので、そういう位置付けではないということでご理解いただきたいと思います。

それともう1点申し上げますと、お宅に送ったというようなことについて、もしそのような形で受け止められたら、大変失礼な形で申し訳なかった思っておりますが、私どもは今回このような形で決まったものを、より早い時期に委員さん方に取りあえずお伝えしたかったというスタンスの中で、取り急ぎ速達で送らせていただいたということでございます。当然ながら委員さん方には、対応が大変まずかったというようなご指摘もあるかと思いますが、私どもとすれば最大限ある意味委員さん方のお立場を、当然尊重する形の中で、あわてて誠意を持って対応した結果で、ただそれが大変まずかったというようであれば、それについてはお許しいただきたいと思っております。

（太田委員）

そうしますと、今後状況を見ながら、教育委員会さんのほうからいろいろな資料が一方的に届けられるということもあり得ることなのですか。

（吉江高校教育課長）

現在私どもが考えている状況でいきますと、これ以上にもうすでに教育委員会が、私どもが少なくとも委員さん方からいろいろお聞きする中で、教育委員会として議論をした上で、ご提案するというようなものは恐らくないだろうと思っております。

もちろんこれから先、推進委員会におきまして、それぞれの地域も含めまして、いろいろこのような資料を出せというようなご提案に対して、用意しましてお届けすることは当然だろうかと思います。ただそういうような意味合いの資料という形ではなくてでいえば、こういうような場面というのは、今後は私どもとすればあまり想定していないということです。

（太田委員）

これはお願いなのですが、今後は委員長の要請によって資料を出していただくということを示していただきたい。これが常識的な運営ではないでしょうか。

（吉江高校教育課長）

冒頭も、立科の遠山町長さんからもちょうだいいたしました、例えばの話が委員会に初めに出すべきだったというお話もちょうだいいたしました。また今も、太田委員さんから要請に基づくべきであったというようなお話もちょうだいしましたが、私どもある意味では、今回この案件につきましては、教育委員並びに教育委員会が非常に重い案件であるというような理解の上で、あえてこのような動きを結果的に推し量った上でやっていただ

いたものであると思っています。

ただ当然ながら、そのようなご指摘もちょうだいしておりますので、今後委員長さん方とか、各委員さんのご要請にお応えするような形を、ぜひ取らせていただきたいと考えている次第であります。

（太田委員）

この件は、各委員の皆さんはいかがなものですか。私だけが、一方的に言うのもまずいものですから、ご意見を聞いていただきたいと思います。

（飯島委員長）

この件について、どうでしょうか。

（佐藤委員）

私も遠山委員が発言したとおりではないかと思っています。ただこの推進委員会ができたという時点で、検討委員会の最終報告を受けて、その結果が14校、減らす。それから多部制・単位制、ならびに総合学科がそれぞれ各通学区1校ずつ、そういう枠をお示しいただきましたよね。そういう枠の中で、この推進委員会は独自にそれなりの案をつくってみてくださいという要請があったのではないかと私は考えておりました。

ですから私も前回発言したのですが、これを検討するに当たっては、特定の高校というのではなくて、再編でなのですから、このブロックの中の全高校にわたって検討し直し、最終的にはどういう結果が出るか分かりませんが、ある時点では教育委員会の校名を挙げた案と、私どもがつくった案との擦り合わせがあって、その結果調整しながら、場合によっては地域に出向いていろいろな説明をしながら、最終的には決定していくという筋書きを私は想定していたわけです。

ですから私は前回全高校対象で検討しなければいけないのではないかと発言したのですが、これは全く内容が知らない中での発言で、見当違いだったのだなと、先日の発表を見て思った次第です。これでは、この推進委員会は先ほどの意見にもありましたけれど、これから何を推進していったらいいのか、もうほとんどシナリオができている中で話を進めていくのか、もう進めるところはないのではないかと考えてしまいますし、今、もうすでにひとつひとつの話を聞いていますと、多部制・単位制とか定時制はどこの高校だという個別な話に入ってしまったというわけです。それではなくて、この委員会が最初でこういう方向で、こういうふうに進んでいこうという骨組みがまずできて、そしてその骨組みに従って委員会独自の案が出てくるのではないかと私は考えていたわけです。けどちょっと正直言って、発言ができないような状況にはなっていると思い、聞いておりました。

以上です。

（飯島委員長）

ありがとうございました。

(原 委員)

今のお二人の委員に続いて、発言させていただきます。

この委員会の位置付けにかかわって、この委員会だけではなく、あとの3つのブロックも同じですが、3つのブロックは1回目の委員会をやったところで、名前が出された。ここは2回やっています。「じゃあ、委員会っていったい何なのか」という疑問を私も持っています。

文字通り前回も出されたこの委員会で、さまざまな意見を出し合って、自由な議論をする、それを縛るものだ、そういう点でやたらに問題が大きいのではないかな。

2点目は、この案が出されたことによって、特に名前を挙げられた学校や地域は、大混乱が起きていたんですね。これはたたき台だ、たたき台と言いますが、名前だけが独り歩きするわけです。私も高校現場で働いていますから、いろいろな方から、すでにお話を伺っていますが、とりわけそこにいる生徒諸君は、非常に不安と動揺が起きているわけです。「うちの学校は、いつつぶれるの」「私たちは、このまま卒業できるの」という格好で出ているわけです。こんな不安を子どもたちに与えていいのでしょうか。さらに言えば、こういう名前がいったん出れば、来年度の入試募集に大きな影響を与えるのは必須ではないでしょうか。

教育委員会の皆さんが、こうしたことを想像できないとは私たちは信じられませんね。こういうことを出すことによって、どういう影響があるのか、これはもう想像力の問題です。一番の基本的な。そういう点から見て、今回の名前の公表は、先ほど太田委員もひどいと言いましたが、私も礼節を欠いていると思います。

(飯島委員長)

はい、吉江課長。

(吉江高校教育課長)

先ほど来申し上げておりますが、各委員さんからそういうお話をいただきましたけれども、私どもは今回のものにつきまして、従来から申し上げておりますように、それぞれの委員会において議論いただく、いわゆる検討材料ということでお出ししているという形です。ですからこの内容が変わる、変わらないという前提はもちろん持っていません。その中で議論を当然ながら各通学区ごとの学校を、見渡していただいて、当然議論をしていただきたい。

また当然ながら、先ほどお話が出ておりましたが、総合学科につきましては私が先ほど申し上げたとおりでございます。それと同時に、仮にそのような形でいくらかずつ骨組みが出てきた場合、今後上田市内にこういう学校は、さらにこういうような雰囲気の学校にもっていったらいいのではないかと、あるいは小諸市内はこうあるべきだと、佐久市内はこうあるべきではないかというようなことで、各それぞれの地域を見渡していただく上で、議論をしていただきたいという前提でございます。

それで今、原委員さんからお話ございましたが、ただお子さんに対しては、これはもちろん私ども教育委員会、最大の配慮をしていかなければいけないと思っております。ただしかしながら1点申し上げますと、今後仮にそれぞれの推進委員会におきまして、議

論が進む中で、具体的な校名が出る場合は、当然想定されます。そうした場合、今、生徒さんに配慮というお話があったわけですが、その時点というのは必ず各委員会におかれましてあるとすれば、その時点でどうしてもそういう場面が出てしまうというようなことはご理解いただきたいと思います。

それでさらに申し上げますと、その時期が遅くなれば遅くなるほど、入試が近づいてくるといえるということもあるというようなことも含めて、ご理解いただきたいと思う次第であります。

（太田委員）

ちょっと、よろしいですか。

前回私は、高校教育でのお客様は誰か、ということで、お客は生徒ではないかということをお願いしました。異論をいただいておりますが、私は高校再編成を進める中では、一番のお客様である生徒に、いたずらに不安を与えるようなことは絶対に避けなくてはならないと思います。

民間会社の事例として、私ども会社でおこなったことをご紹介します。当社も顧客満足徹底を徹底することができず、拠点の整理統合等縮小均衡策により1,500人の従業員の半分以上を削減しなくてはならない状況におちいったわけでございます。早期退職優遇制度によりご協力を仰いで、退職をお願いするという誠に苦しい選択肢を選ばなくてはならなくなりました。

この場合は、従業員の皆様に早期退職優遇制度の募集公開するまでは、会社の再構築策を含めて一切を丸秘扱いで検討をおこなうわけであります。

それはなぜか、事前に会社がやろうとしていることが漏れて、従業員がいたずらに不安、脅威を与えることは、生産性に大きく影響することになるということです。毎日が心配で、俺はどうしよう、そんなこと考えていて良い製品ができるわけがありません。

教育の現場でも同様だと思います。低次の安定、安心の欲求が満足されなくては、高次の自己実現欲求の段階にたどりつけない、というような理論もあるように、多感な時期の生徒であればよけいに、目の前の不安によって、勉学に集中できないのではないかと考えられます。

対象高校の生徒には、事前に問題点を洗いだし、問題点をつぶし、セイフティーネットを準備してから、公開するような配慮ができなかったのか、この点残念であります。

今後は教育の原点に立ち返り、十分な配慮をお願いしたいと思っています。

（飯島委員長）

はい、ありがとうございました。

（和泉委員）

最初からの話を聞いていて、私も最初のときは要するに学校の名前を出さないで討議しましょうと言っても、先に名前が出てしまった。これは先ほど佐藤委員が言われたとおりシナリオありきのものを、ここである程度はひとつの場を借りてスルーさせていただける手法にしか、私は思えません。今、いろいろな案件が出てきていますが、手法はそのよ

うにしか理解できませんね。

例えば先ほど、丸子実業の話で「利便性」と言われましたが、委員会が利便性を判断したのには、交通のアクセス、あるいはアクセスは悪いけれども、このゾーンだったら、例えば併設して寮施設も補完する意味でやるから、というものがセイフティ・ネットだと思います。そういうものの説明なしに、単純に利便性という言葉を借りていますが、自分たちが生活している生活圏内であれば、実態としてそういうようなところを、生徒や地域の方々は敏感に感じると思うのです。

その点についての考えや補完するものをセットで提示できればある面では理解するかもしれません。あるいは丸子実業を選ばれたのだったら、我々企業のレベルからいきますと、ここの学校（丸子実業）が集中的に充実しており、あらためて別の箇所で行う場合には、投資していく面で金が掛かるので、これは皆さんの税金、地域の効率から考えても、こういう形で収めたいといったような、もう少し分かる形で説明していかないと、シナリオありきと感じてしまいます。

皆さんは専門家だから情報を握っていて、分かっていらっしゃるのですが、これはまさに地域を巻き込んで、生徒を巻き込んで、社会を巻き込んでいるのですから、もう少し分かる形にさせていただいたほうが、私はやりやすいです。

それからあとひとつは、討議に関することですが、私は最初から危惧（きぐ）していますが、皆さんは公立の立場でものを考えていますが、我々民間というのは、競争相手、つまりライバルを考えるのです。皆さんは、自分たちだけで相撲を取っているようなつもりでいらっしゃいますが、佐久地区には私立高校もあります。私立高校は皆さんよりも、スピード力、なおかつ生徒のことを考え対応している。寮、あるいは車、そのような点についても危機感がないといけないと思います。何か自分たちのシナリオを描いていかないと、うまくいかないという考え方をしているのは、いかがなものかと感じてしまいます。

先ほど荻原委員から言われましたが、このスピードが描かれている以上に多様化していくと思います。それは皆さんが父親、母親の立場になったら、こういう絵を描いていても、「うちの息子はここには入れない」と。昔は住所変更までして、やっぱり行かせたいところ、子どもが望むところに行かせていたと思います。そういうことについて、もうちょっとアンテナを高くし、あるいは配慮をされた進め方をしないと、この委員会は私から言わせれば言葉は悪いですが、教育委員会のガス抜きの場になってしまうのかもしれません。それはいけないと思います。私も委員として選ばれました。この委員会のテーマも幾つかあります。この委員について自分の意見と、自分の考えだけは出したいと思ったから、ここに参加しているのです。そここのところだけは、もうちょっと理解してこの通りで参加したいと思います。

以上です。

（飯島委員長）

はい、ありがとうございました。

(西村委員)

今、いろいろな委員の方からお話がありましたけれども、私も教育委員会に一言お話ししたいと思います。

まず、物事というのは説明責任があります。こういう事象を出した場合には、こういった理由でこうですよというのが必要です。多分忙しくて色々とバタバタされていたと思いますが、ちょっと説明不足です。例えば、遠山委員から言われたコストの問題はどうなっているのか。こういったことを導入すると、例えば総合学科をつくると、逆に最初は金は掛かるんですよ。ところがこういった型を続けていくと、こういうコストの削減になりますよとか、それぞれの高校がこういった型になっていきますよとか。それをもうちょっと具体的にご説明する必要が私はあったと思います。

ただ、検討委員会を2年前から始めて、こういう形でもう2年3カ月たちました。その上でお出しになったこと自体、私は真摯(しんし)に受け止めて、考えたいと思います。

これはあくまでのたたき台です。我々は教育委員会の下部組織ではありません。ですからぜひ、この推進委員会の中で、「東信地区でこういった学校をつくろう」とか「こういったのを出そう」とか、そういうものを出して、これをまた教育委員会のほうへ提言すればいいのではないかと私は思います。

ただ若干、おっしゃったように多分忙しかったんですよ。説明はなかなか難しいのですが、説明不足は否めません。

事実、私も現場を預かっている校長ですが、名前が挙がった野沢南高校では先週全校集会をして、校長自ら「これはたたき台だよ。みんなもうちょっと推移を見守ろう、文化祭が近いから、文化祭を頑張ろう」ということで、説明をしました。

以上です。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございました。

(小林委員)

先ほど、この委員会を何とすればいいかということで、ちょっと苦笑が漏れました。私もそんな感じがしております。この設置要綱に4つございますが、魅力ある高校づくりということで、議論しつつどんなふうに、どんな子どもたちになってほしいかということで、夢とまではいきませんが、お互いに理想的なことを出し合いました。私もそう思って、議論に加わりました。

そのときにこの、魅力あるという観点で、東信、第2通にある高校をもう1回見直すべきではないだろうかと、「こういう魅力ある学校である」、「この高校はこうだ」ということを検討しながらやっていくのではないかと思いますところ、本日校名が出たということで、その魅力という話がどこかへ飛んでしまってケンケンガクガクです。そうするとその魅力とは、適正配置をした後の魅力というふうになるのですか。

どうも事務的な、義務的な、そんなほうに行く、これ主客転倒しているような感じがして、ちょっと議論に加わりきれないでいるところでございます。私は新聞報道だけしか知りませんが、議論が深まった段階で高校名を出すということでしたので、私たちが

議論を深めながら、それを教育委員会が、忖度（そんたく）しながら公表、と思っておりましたら、どうも私の記事の読み間違いか、表現がちょっと違ったのか、教育委員会、県教委での議論が深まった段階と先ほどいかがだったのでガクッとしました。

それで、高校名を出した。これは事実ですから、取り消すことができない。では、それを前提にして、今後私たちが今からでもいいですし、次回からでもいいですが、どんな順に整理しながら話を深めていくかという、およその見通しを立てて、みんなで話し合っていかなければいけないのではないかと。この適正配置を、まず一番先に話し合うのかどうか。やってしまうと、魅力ある高校というものは、そういえばそういう魅力ないような議論になってしまう。どうも私たちの進め方は、これは最初にこの設置要綱で出ております。第二通学区では、マイナス2校でそのうちの1校は多部制・単位制にするというものを前提にして話し合うのか。それもないものとして、ゼロからやるのかという、そこら辺の私たちの考え方を決めないと、話は深まっていけない。次回もこういう話の繰り返しになるのではないかとということで、筋を通していただければありがたいと、こういう提案です。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

（米澤教育次長）

今、小林委員さんからのご意見がございましたところ、ちょうど私が24日に公表させていただきました翌日、先ほどの冒頭の説明でも重なりますが、25日の土曜日が第一推進委員会で私も出させていただきました。26日の日曜日、第四、松本ですが、そこも出させていただきましたので、そのときまさしくその辺りの議論がどのように収れんしていったかということをご紹介させていただきますと、第一推進委員会の中村委員長さんは、そのところを「この再編案があるから魅力づくりの議論ができる」というようなふうにおまとめになりまして、第一推進委員会は次回へと進展したところでございます。

それから第四推進委員会では、中條委員長さんが「魅力づくりと、この再編たたき台というのは合一する」という考え方を述べられて、会としては全体が次回への進展と収れんしたところでございます。

ご参考までに、よろしくお願いいたします。

（市川委員）

その参考に関係するかどうかと思うのですが、もともとこの委員会に与えられた義務というのは2つあるのは、皆さんご存じの通りで、一番目が魅力ある高等学校づくり、そして2番目として適正規模という形になっていると思います。

これについては、規模が適正から始まっているところに問題があるのではないかと私は理解します。まず、魅力ある高等学校というのはどういうことかというのを議論して、その上で、それなら規模をどうするかというところに落ち着くのが本来の姿ではないか。それがいきなり適正規模という数が出て、具体的名前が出てきたから、「じゃあ、この委員会は、あと何をやればいいんだい」という。もうやることがないようにも誤解される。そういうところから、やはり本質的には魅力ある高等学校づくりというのはどういうものか、

そのたたき台として総合学科あり、多部制ありという形が出て、さらにほかにはもしかすればあるかもしれませんが、そこから始まって、そこから始まって、そのあとに「じゃあ、それに基づいてどうするか」という、その順序が逆。私は、教育委員会は結論を急ぎすぎたかなと思っております。それと、本当はやはり、具体的な校名を出すのは、ちょっと時期が早すぎたと思っておりますが、いずれは出さなければいけないのだとすれば、もう出しちゃったので取り消すわけにいかないの、それを基にみんなで議論する。それしか方法がないと思っています。

以上です。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

教育委員会の校名発表に対してのご意見をいろいろいただきました。

私も委員長ですから、なかなか意見が言えない立場でして、ここに座って交通整理をしているわけでありまして。2点ばかりあえて、委員長の冠を外させていただいて述べさせていただきます。

1点目は、この委員に指名されたということでありまして。これは先ほど太田委員もおっしゃっていましたが、企業で指名されたわけではない。私も、長野県保育園連盟の会長ですけど、会長職を以て指名されたわけでもない。ただ会長を請けているからという環境は、大いに選考される条件として影響はあったと思います。多分、それぞれの委員さんもそうだと思います。特に今の県の委員を指名する方法は、今まで私たちの保育園連盟でいいますと、保育園連盟に今度こういう委員会を長野県で設置したい。委員を推薦指名してくださいという依頼が来るわけです。そうすると委員を出すのですけれども、今回はその逆であります。

ですから私自身も、ある会員から「会長、そんなもの請けて、役員会通して請けたかい」、こういうおしかりを受けています。ですからその辺のところを自分に置き換えて考えると、そうしますと、先ほどの太田委員の逆で、県保育園連盟事務局へ書類が送付されると困るんですね。自宅へ来てもらわないと困る。これはどちらが正しいということとは別問題です。これがひとつです。

それからもうひとつ、校名が出るということ。先ほど、吉江課長が言っております。どこかで校名が、議論の中で出る。それで新聞報道や、その他のところで、この第2が、“時においては非公開にする”ということでおしかりを受けたということがございます。でも、いざ校名を出すときには、私は非公開にしてやろうという思いはあったんです。私、委員長として。そうでないと、むごいです。今回のように公なところが発表しても、これだけいろいろ言われるわけですから、もし単なる委員一人が校名を出したら大事ですよ、言葉は悪いですけど。多方面より責められてしまいます。

ですからそういう意味でいうと、非公開もあるのかな。大いに議論をしたあと、委員会総意で発表という形があってしかるべきだと思っています。ただこれは、今、言っても出てしまいましたから、どうしようもありません。24日ですか。私もこの発表はテレビニュースで初めて知りました。そして、インターネットへアクセスすると資料が公開されていたということです。

ですから委員会に対して軽率だったなということは否めないと思います。ただ、このまま委員会を解散するということでは、あまりにも能がないと思うんですね。出た以上は、先ほど言いましたように、時には非公開したり、徹底的にこの第2通学区は議論を深めると、その結果、ひょっとすると報告が県教委の意にそぐわないような結果になっても、委員会の統一意見として出していくという形。その辺が大事なのかなと私は思います。

そして私は、この委員会をこのまま続けていきたい。と、というのが、私の委員長の冠を外した意見であります。

ちょうど、3時30分になりました。開会してから1時間30分になり、だいぶ頭もごちゃごちゃになってきてしまいましたので、ここで10分ほど休憩を取りたいと思います。

(太田委員)

委員長のご発言で、自宅に送られたということについて言及されていますが、私が言いたいのは、この場で公表していただきたかったという意味ですのでご理解ください。

(飯島委員長)

そういう意味ですか。分かりました。

(太田委員)

ええ、申し訳ないです、お願いします。

(飯島委員長)

分かりました、はい。

それでは、私の意見に対してのご意見もあろうかと思いますが、それはまた再開後といたしまして、この会場の後ろの時計で40分まで休憩とさせていただきます。

よろしくどうぞお願いします。

【休憩後再開】

(飯島委員長)

それでは、お約束の休憩時間が終わりにになりました。

休憩前に引き続いて、委員会を再開したいと思います、よろしくお願いします。

前半の最後に委員長の冠を外して私見を述べさせていただきましたけれども、最終的に私たち委員を委嘱されました。経過がちょっと、我々の委員会とはそぐわない方向で、いろいろ動き始めていたことで、前半いろいろご意見をいただきました。第二推進委員会は、実際は、高校の学校名は公表されてしまいましたけれども、忘れろと言っても印象が強く忘れられませんけれども、それはちょっと脇に置いておいて、前回、私たちは第2回目の委員会を「魅力ある学校づくり」と、ということで議論を始めてきております。できればそのところへ、タイムスリップしていただいて、意見を深めたいと思いますので。そうしていただければ、この先議論が、この第二にふさわしい経過に深まっていくような気がする

のですが、お願いしたいと思います。

（中沢委員）

その今のことですが、具体的に出された高校再編整備候補案というのが文章で出されましたが、そこへ行く前に魅力ある高校づくりについてやりたいと、こういうことですか。

（飯島委員長）

私たちはこの発表前に動き始めてきておりますね。ですから、第二推進委員会は、そこへ戻って議論の続きをしたいと。当然学校再編については検討するという委託事項があるわけですから、それについてはそのときにまた話し合いをするようにする。そうすると、魅力ある学校づくりの議論が深められた後でありますから、また違う、今度は、たたき台とは違う形が出てくる公算も大だろうと思うわけであります。

そんなふうに進めさせていただければと。それは難しいことでありますけれども、そうせざるを得ないということで、難しいことをあえてお願いするわけでございますが、いかがでしょう。

（市川委員）

質問をお願いします。

ひとつ質問をお願いしたいと思っておりますが、事務局の先ほどの休憩前のお話で出ていたことですが、今後の資料は、このような唐突に具体名で提示されたものが、今後は出る予定はないというお話がありました。

しかし、入試が迫っているというお話があったと思います。今度のように、私たちが、ここで話をさせていただく中で、こういう具体的な案が少しでも出ることがあり得るという前提がある中で、そろそろ話があるかなという構えが全くない中で、またこういう資料が出ました。

入試があるというようなお話が、迫っていらっしゃるといえば、今回出された資料に関しましても、当然その地域の反応、具体名が出されたときの学校内での在校生の反応、すべては予想がついていらしかったことだと思うわけです。

あえて、この時期に我々の推進委員会の議論の流れでもない中にも出てきているということ。何か、この3月に至るまでのシナリオ等はないとは思いますが、焦っていらっしゃる何かが、内部にあるのではないかというような、そういう段階の中で、この時期にこれを出しておかないと、その議論がどこまで進まなければならないからということを見通しが立たなくなって出されるとか、そういうような見通しがもしあるならば、お話しいただければありがたいと思います。

（吉江高校教育課長）

実は、先ほど入試のお話で、割愛させていただいたのは、たまたま原委員さんからそういう心配されるお話があったから申し上げたのですが、そもそも論で18年度末までに計画ができたとして、18年度の入試には間に合わないというのが大前提でございます。これは当然ながら、入試というのは募集定員を決めるのもことしの秋口には、いくら遅くても決

めないわけにはいけません。さらに申し上げますと、夏休み前にはそれぞれの学校が、いろいろな学校の説明等を行いますから、その時点でましてや来年度募集うんぬんというような理論になるような状態ではないということの中で想定していましたが、たまたまお話が出ましたので申し上げたまでです。

スケジュールというお話であれば、私どもは当初からおおむね12月末までにご報告をいただいて、年度末までに改革を策定してまいりたいというような、ひとつの考えは持っておりましたが、それ以上も以下でもございません。

そんなことから、今、お出ししことにつきましては、最終的な判断の中で、本当にいろいろなご議論はあったと思いますが、なかなか各推進委員会さんのほうで、こういうような微妙な話は出しにくいというような判断を最終的にした上で、委員会のほうでお決めいただいたまででございまして、それをもって出さなければ間に合わないのではないかとか、あるいは当初の計画がそういう計画であったとかいうものではないということとはご理解いただきたいと思います。

（飯島委員長）

佐藤副委員長、よろしいでしょうか。

（佐藤副委員長）

私も、副委員長ということで、委員長を補佐しなければいけない立場にありますが、これからの進め方について、私のほうからちょっと申し上げますと、最初にこの委員会が始まるときに確認したわけですが、検討委員会の最終報告がありましたね。それにのっとってということで、皆さん基本的に支持されますでしょうかということなので、もっと具体的に言いますと、この第2通学区は現在17校の中から15校に、そのうちの1校が多部制・単位制です。そういう大枠を示していただいた。その枠にのっとって今は、進めていくかどうかというのが1点。これは再度こういう話が出たから確認するわけでございますから1点。

それから先ほど芹澤委員さんのおっしゃられたような、もしそれで皆さんの合意が得られるとすれば、そういう形で行きましょう。それから次の段階として、ではその枠の中で、魅力ある高校づくりをやるためには、この枠を外しますよということもあり得るだろうということで進めていくということと、それから最後には各通学区ごと、交通の便、規模の問題、これは私も前回申し上げましたけど、やはりある程度の適正規模というのは必要ではないかというような意見を述べたわけですが、その規模についての意見を皆さんで調整していくこと。そんな感じで順次進めていけば、教育委員会は時間的に焦っているかどうか分かりませんが、急がば回れという話があります、やはり今回筋道を通して、今、言ったような順序で進めればいいんじゃないかなと思います。

このような話は、大枠を決めて細部へという形で進めていかないと、細部の話をしてもなかなかまとまりません。大枠を決めてひとつひとつそれを詰めていくという形でいけば、議論が発散してしまえば駄目ですが、私は期限内には収まるのではないかと思うのです。そのためには先ほど説明責任という話が、ございましたけれども、やはり進めていく段階で、ある段階ではその地域に行つてとか、地域ごとの今の知事さんが進めているよ

うな、車座集会のようなことを行って、委員が責任を持って説明して、だんだん納得がいく形で進めていかないと、いつまでたっても話は収斂（しゅうれん）しないのではないかと思います。

やはり結果は同じでも、プロセスが非常に大切だということだと思います。

以上です。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

佐藤委員のほうから、委員長の至らないところを説明していただいて、整理していただきましたけれども、当初この委員会は、委員会の設置要綱にのっとって、委員会を進めていこうということは確認したわけです。今回こんなに混乱してしまいましたから、もう一度皆さんに確認しましょうということであります。

17校あるのが最終答申のように15校になって、あと総合学科、あるいは多部制・単位制にするということも含めながら、これを検討材料にしてということを進めていくことはご理解いただいて進んでいたわけです。その討論の最終的なことは、どうなるのか。これは分からないわけですが、これにのっとって進めていく。ただ最終的に1つ減らすのが、こちらでは難しいよとか、第二には、2つ総合学科がほしいよということになるかもしれない。その時点で、そうなるかもしれないということでもあります。

最終報告を基にしながら、私たちは設置されたということは認識してスタートしたわけですが、それはよろしいですね。

（原 委員）

進め方についての、提案がありまして、今、委員長さんは最終報告を基にしてというふうに微妙に表現が変わったかどうか、佐藤委員さんは最終報告にのっとってという。この「基にして」と「のっとって」はどこが違うんだという議論もするわけではありませんが、最終報告についての理解の仕方は、これは温度差が当然だと思います。ですから76校、これは私が、第1回目も第2回目も、その根拠となる5.5であるとか、76については数を出しまして、これについてもまだ充分納得いくご回答を得ていないものですから、そういうことを含めて当然これは温度差があるわけですから、最終報告を基にして議論をしていくという辺りは、おおむねそういう点でご理解いただきたいと思うのです。

それから2点目は、佐藤委員さんは、審議の仕方についての踏み込んだ提言がありましたが、例えばそれぞれの地域に赴くとか、あるいは小さな話し合いの場を設けるとか、こういうことは私は大賛成です。前回に部会ということも考えたらどうかということを申し上げたので、それはそういったことを含意にしているわけであります。

それからもう1点は、休憩前に委員長さんが会議の公開非公開の問題について、前回の確認というイメージを込められたと思うのですが、私は前回も申し上げましたが、第1回の委員会の立ち上げのときに、会議は原則として公開とする、その確認で十分だろうということを、前回第2回のときも申し上げました。日曜日にもかかわらず、多くの方々が関心を寄せられて傍聴にお見えになっているわけですから、原則として公開という筋で、どうしてもそういう場面はあり得るかもしれません。それは今後の成り行きですね。だから

それはそのときであって、しかもそれについては充分丁寧なやり方が必要で、遠山委員が経験されたように、教育委員会に傍聴に行ったら、本日非公開ということでは具合が悪いですね。何 10 名の方がいらっしゃっているわけですから。ですからそういうことについても、非常に丁寧な配慮をして、会議の運営をしていただきたいということを申し上げたい。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

2 点目の地域に赴くとか、実際に高校に行って意見を聞くという、この委員会の挙行については教育委員会はどういうふうにお考えですか。部会というのは、要綱の中に盛りれておりますね。でも、これ以外のところで委員会を開くとか、そういうことについて。

（吉江高校教育課長）

今、お話がありましたように、部会につきましてはそれぞれの部会で何が知りたいかというようなことを議論いただいた上でないと、なかなか設置は、というようなことで、第 2 回目でもそういう話があったかと思います。ただ、委員会そのものを、実は佐久からは、佐久地区でぜひやってほしいという話も私のほうでも承っております。本日、また上田で申し上げてしまいましたが、委員長はじめ各委員の皆さんが、例えばこのような場面で、このような人たちの話を聞きたいということがあるとすれば、そのようなことにつきましては各委員の皆さんのご判断の中で、必要に応じて開催する形で事務局としても考えさせていただきますと思いますのでよろしくお願いします。

（飯島委員長）

今のような委員会へのご答弁でよろしいですね。

それでは次のような形で進めさせていただきます。前回に戻って、魅力ある学校づくりという話になりますと、また前回話したところへ戻ってしまったりします。多部制・単位制について、せっかく今日は資料が出ていますので、その資料にのっとってもう少し細かく説明をしていただこうと思っております。

（原 委員）

魅力の問題で、多部制・単位制に絡み定時制教育にわたって話させてもらいます。前にも申し上げた記憶がありますが、ここ近年定時制に入学してくる生徒は増えております。例えば全県でいきますと、高校生のピーク時の平成 2 年 1990 年に 1,600 名余ありました。今、全体の生徒数はそこからみて 65% まで落ちています。これは資料に書かれております。しかし定時制でいきますと今年度平成 17 年度で 1,675 名おります。つまりピーク時と変わりません。

近年になく例えば今年でいきますと応募者が多く、やむを得ず入試のときに落としてしまったという学校さえあります。それだけ今その定時制へ来る生徒が増えております。私の勤める学校もそうですし、今度廃止の対象になっている上田 2 校もそうです。この数字をぜひ委員の皆さんにお考えいただきたいのです。いろんなところで話がでていましたが、

定時制に来る生徒はさまざまであります。小学校・中学校時代から不登校体験。それも非常に長期にわたる不登校体験をもった生徒もいますし、あるいはそのほかの事情で来ている生徒もいますが、それにもかかわらずこれだけ増えているということは、さまざまな選択の動機はあるでしょうけれど、今日の定時制教育の必要性を如実に物語っているものだというふうに思います。

本日出されている資料１で、定時制の再編整備にあたるという文章がありますが、定時制はここに書かれているとおりだと私も思います。「学びの場」と同時に「居場所」でもあると思います。しかし、学びの場であり居場所であるのがなぜ多部制・単位制になるのかこれは論理の飛躍だと思います。私どもの定時制教育に携わっているものの共通の感覚は、居場所というものをとっても重視します。その居場所は最低３つくらいを委員の皆さんに思い起こしていただきたいと思いますが、さまざまな体験、経験を積む中で定時制に来て、まず安心を求めます。ここにいていいのだと。競争や管理が強いところではなくて、安心していられるということが第一であります。

２つ目は規模です。小規模であり少人数であることが、この第一の安心と結び付いて必要な条件であります。第３番目は通学に時間が掛からないということです。近いところに行ける。これがまた安心に結び付くわけです。私は少なくとも、つまりはその居場所を支える条件だと考えていますが、多部制・単位制になった場合、これらをこの学びの場、居場所を保障することになるのが論理的にそこは結びつかない。

そもそも定時制は、例えばこの８０年以降考えましても、ほぼ四半世紀で１７校も廃校になってきている訳です。分校を含めてです。ほとんど統廃合は終わったと私は考えています。ところが今度のような提案になると、今、言った居場所が保障されない。必要な定時制教育、これこそ、そういう生徒たちにとってみれば魅力であります。そこで今、三修制のところへ入っているところがありますが、３年とか４年ですね。中にはやむを得ず休学ということもあり、それ以上の歳月を掛けるケースもありますが、そうこうして学んで、ここで学んでよかったという思いを持って出て行く。このことを十分に配慮する必要があります。

そういう魅力問題について、まず定時制教育の面から発言をしました。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

今、経験から原委員よりご意見を伺いました。そういう意見のある中で、なぜ多部制・単位制高校というものを取り入れてきたか、ということを私たちは教育委員会の意見を聞く必要があるのではないかと思います。先ほど言いましたように、今回の資料は私たちが要望した訳じゃありませんが、富山県の一高校の多部制・単位制の学校事例の学校要覧が添付されてあります。それにつきまして、分かる範囲で構いませんが、今の原委員から安心、通学の時間、あるいは子どもたち、生徒の居場所、そういうところを見つめながら、新しく富山県で多部制・単位制に移った夜間単位制が、どのような型で推移しているか、分かる範囲でご説明いただきたいと思います。

(柳澤教育主幹)

それでは分かる範囲ということで、多部制・単位制につきまして若干補足させていただきます。

今日の最初の資料1のところに、定時制高校の再編整備にあたってということで基本的考え方、そしてまた定時制の充実に向けた取り組みということで、資料をご用意させていただきました。この基本的な考え方の中にありますように、かつての定時制は、いわゆる勤労青少年のための学びの場ということで大変重要な役割を果たしてきていたわけですが、ご存じのように、今日必ずしもそういったニーズだけではなくて、そこにございますように多様な学習歴、生活歴を持った、年齢もさまざまな方が学ばれておられます。

そういう中で2番のところにございますように、例えば募集停止した学校の空き教室の利用というようなことで、ニーズに応じて相談室の開設、そういったところでの遠隔学習の設備といったような支援体制をとということで、そこに載っているわけですが、多部制・単位制のニーズというのは、他県でもそうでございますが、大変高くなってきているように思います。

といいますのは、今言いましたように、必ずしも夜間でなければ通えないというお子さんだけではございませんので、そういう生徒さんもありますけれども、多くの子どもさんたちが、今でいいますと不登校経験を持った方ですとか、一度全日に行ったけれどもまた学びたいとか、いろいろなケースがございますので、そういう意味からいきますと時間帯を多様に選べる、しかも学ぶ年数も自分のライフスタイルに応じて自由に設定できる、自主、自律的に自分のペースに合わせて選択をして単位修得ができるという利点がございますので、今の子どもさんたちのニーズにはかなり合っているかなというふうに思っているわけでございます。

また、現在松本筑摩高校が昼間定時制と、夜間定時制と、しかも共通の科目を設定して単位制を採っておりますが、ご存じのようにここは、大変競争率といいますか、1倍を超えて、生徒さんが集まってきているという状況もございますので、恐らく通学区に1校ずつということで、今出ているわけですが、そういう点から言いますとそれぞれ4つの通学区に1校ずつ設置しましても、いろいろなニーズに応える学校になっていくのではないかと、こんなことを思っております。

そして先ほど、生涯学習というようなお話しがございましたけれども、いろいろな、いわゆる科目履修制といいまして、地域の方々の生涯学習の場にもなるということで、例えば松本筑摩高校の場合も、土曜日に講座を開設しまして、一般の地域の方も大勢受講されております。そういう意味からいいますと東信地区の生涯学習の拠点というか、そういうイメージも持てるのではないかとということでございますので、中身の問題につきましてはいろいろなバリエーションがあろうかと思っておりますので、そういった点もご審議いただければと思っております。

(原 委員)

ちょっと質問をお願いします。

私があえて居場所という問題について3つのことを申し上げたんですが、そのことにはお触れにならないわけですね。

議論を 100 歩譲ってもいいんですけど、多部制・単位制をつくること、これは一応置いておいて、つまりそれが必要だろうと、しかし、現実の定時制が各地にあるという、この事が重要な意味を持っているということを、僕は特にその事を強調したんです。その事にはお触れにならないのですね。

（吉江高校教育課長）

その関係で申し上げますと、今この旧第 5、第 6 通学区には上田千曲高校、上田高校、小諸商業高校、野沢南高校に、定時制が配置されております。それで、この 4 つに配置されているものに対しまして、すみません、先ほど来批判を浴びている、私どものほうで出してしまった検討材料の中のを若干触れさせていただくことになってしまうのですが、そうした場合に、上田千曲高校と上田高校は仮に坂城高校が今後、多部制・単位制に移行すればほぼ近いところに、しなの鉄道で非常に便がよろしゅうございますので、その距離を考えた場合にはなからいいのではないかと。そういった場合に、やはり、小諸商業高校とか、野沢南高校とかはいろいろ立地条件等考えれば、残さざるを得ないだろうということで、それぞれの通学区を検討しております。

そのようなことですから、実は多部制・単位制をつくりますと、昼間をどう設定するかということがありますが、一般的には今までの定時制というのは、夜間だけのイメージでしたので、40 人募集の 1 学年 1 学級募集であったものが、昼間も来られるということで、それによってある程度、時間帯によつての募集を図れますから、そういう意味での利点を感じています。確かに原委員さんがおっしゃるように、小規模がいいという議論があろうかと思いますが、反面ある程度の規模にすることによって、専門的な教員の配置もできますから、それによつての履修効果も図れるというような利点もあります。また先ほどいろいろ話しに出ておりますように、今の生徒さん自体が実際問題とすると、昼間通っても可能な生徒さんが大勢いらっしゃいます。

その辺も配慮した場合ということでご理解いただきたいと思います。

（飯島委員長）

ありがとうございました。

（和泉委員）

これは、私の意見ですが、進め方についてもう 1 回確認したいのですが、こういうポイントに入ってくるので少し気になるのですが、一番大事なところはまず魅力ある高校づくりです。このコンセプトをやはり、この委員会で徹底的に論議して、ある程度の方向付けをやるために、例えば定時制も必要、あるいは多部制も必要、学校数も含めてです。そのところを決めないでいて、いきなり点に入ってしまうと、我々というのはこれから将来ある生徒さんに、どういうことを期待し、あるいはこうしてサポートしなければいけないか、あるいはどういい環境で保持しなければいけないかが、まず十分この委員会の中で、討議ですから収斂（しゅうれん）するかどうかは別として、そういう中で具体的にそれをやるための手段だとか、運営だとか、どこに置くかとか、校数だとかということを次のポジションに入らないと、いきなり校名から入ってしまうと議論が進まなくなってしまうの

ではないでしょうか。

我々が求めているものというのは、この前はテーマが2つありました。私は最初のときにどういう進め方をされるのだろうと、自分なりに意見を持ったり、葛藤しながら、どうしてもこのロジックに入ってくると、やはり魅力ある高等学校というのはどうあるべきかというのを、1回委員の皆さんで、個人的には討議して、その中で今も教育委員会のほうから、「ほかはこうやっているよ」ということはひとつのヒントや意見にはなっても、私はむしろ私自身が個人的に思っていることは、この第2通学区にはこんなアイデアがあってこういうことをやろうとしているとか、むしろそういう建設的なことの討議に入るには、もう少し魅力ある高校づくりということに各委員さんの意見を聞いてみたいのと、そうすると次のステップに行くのが割と分かりやすいのではないかなという、いろいろな意見を聞いて思ったので、少し意見として出させていただきました。

（飯島委員長）

魅力づくりというのは非常に漠然としたものですからね。

（和泉委員）

あと、1点はだからスキームがあればいいんです。

（遠山委員）

私も魅力ある高校って何だろうと考えた場合、今の職業高校ですか、職業なんですか、あれは魅力がありますかね。例えば、工業、農業。農学校もありますね。工業のほうもある。それから商業、魅力ある学校になっていますか。私はもっと、工業だったら、同じような古い旋盤を置いておいて、頭の古い先生が来て、理科や数学を少しくつつけてね、こちらのほうへ長野へ出ていたりした先生が来て、見れば古い機械が据え付けてある。

この辺だって、国でやっている高専ですか。あそこを見ていると工場みたいだね。学校自体が。それに比べれば、県立のそういった、施設、設備、環境生きていますか。私は、まるきり生徒には評判悪いと思いますよ。あんな分からないようなことを、ただ基礎知識だか何だか知らないが、教えられたって。子どもたちは、あそこへ行って機械をいじったり、新しいものに挑戦したいと思っていますよ。なんでも試験ができれば頭がいいんじゃないですよ。先生になるならそれでいいけれど。

こうやって、高校を出てきて明日から仕事へ行く。今あれですよ、職業訓練所というのがあるね。あれのほうかはるかに充実している。はるかに。今の高校のこの職業教育、こんなものもっと充実させて、しっかりしたひとつのものにまとめたり、そういう話でないと昔の案を引きずって、昔ながらの先生が、先生だっていいですよ、ぜひ師範受かって先生の資格受けてなくたって、どんどん外部から入れて、もっとよくなる、そういうものに私はしなくてはいけないと思います。

そのためにはその学校をどこにやったらいいかと、これを考えていかないと、結局金が掛かるわけですから。職業高校等というのは本当に金が掛かるんです。今のままでは全然魅力がないですよ。頭が悪いから職業科に行ったなんて考え方持っているでしょ。とんでもない、何でそうなる、何でそんな全然違いますよ。こっちのほうはね、書くこと嫌い、

読むや書くことは嫌いだけど、そのうち機械を動かしていれば、抜群の力がある者もあるんですよ。あるいは、新しいものを開発する。

私はこの間、豊田の豊田佐吉の記念館に 2、3 日前に行って来ました。決してあの子は優等生じゃないね。夢中になってね、母さんが機を織っているのを見て、何とか楽にさせてやりたいということから始まって、もちろん頭のいいばかりじゃない、学校じゃ抜群の成績かといえば、そうじゃない。そういうことは言わないわね。今のトヨタの前身ですね。豊田織機の。

そういうものをもっと引き出す威力、隠れた能力そういうものを引っ張り出していくそういう社会にしていけないとね、これから学校は 1 番遅れちゃいますよ。そういう上で、そういうものをちゃんと確立した上でね、私は学校を考えるべきだと。ただ県でどこと、どことあそこだ、あそこはやめよう。もしそういうものがしっかりした学校が田舎にできみなさい、日本中から来ますよ。施設に困らない。山の中につくったって来ますよ。そういう研究者が、山の中、そんなことは関係ないですよ。そういうことをぜひ、私は魅力ある高校づくりを考えた場合、一律で考えるなど、そういうことをいつも思っているんです。

以上です。

(飯島委員長)

少々またもとのほうへ戻ってきてしまって、教育論という話になって。

(佐藤副委員長)

魅力ある高校づくりに関しては、2 回目でだいぶ議論をしましたが、今、遠山委員さんの言うとおりでございますが、お聞きになって分かるように魅力のある高校づくりというのはそんなに言うほど簡単ではないということです。かなり具体的に実際に決めていかないと、一般的教育論の話で、話しをしてもなるほどそうだなということは分かってもらえませんが、私はそういう中で、ごく端的に言うならば、自分の能力を最大限に引き出してくれる学校、いうならば進学校ですよ。これはもう、最大限に引き出してもらえる学校。それから職業科であれば、専門的ないろいろなことを学び、もっと先の話としては就職に有利な学校。こういうのが魅力ある学校なんだと思います。

ですから、行ってよかったなという学校づくりというのはそんなに簡単ではないので、この委員会で魅力づくりの話をするのは、ある程度時間を切ってやらないと話が終焉(しゅうえん)しない。ですから私は大きく言うならば、さっき言ったように自分の能力が最大限に発揮させてもらえるような、能力を引き出してもらえるような環境のある学校、それから、2 番目に同じようなことですが、職業高校であれば就職に有利な学校、それから先ほどの定時制の場合ですが、これは自分の事由によっても学校に行くのが困難な学生、こういう人がいる居場所がしっかりできた学校、そういうふうに具体的にきちんとやらないと、なかなか現実の問題としては無理があります。スパンの長い話の中であればいいんですが、ある程度時間が決められた中では、魅力ある学校づくりという議論は一般の人のサンプルの中で、大体こちら辺の議論の集約の最大公約数的なところで打ち切る。そしてあとは、その中に先生方が、職員がいるんですから、そこでしっかりソフトの部分

は補ってもらう、補ってもらうというよりも、実現させてもらう。

こういうふうに話を持っていかないと、魅力ある学校づくりというのは、私も長いこと学校教育に携わってまいりました。私は新しい短大を初めてつくりましたが、そのとき何を言ったかという、2次募集だけは絶対してはいけない。2次募集をすると魅力ある学校づくりをずっとやってきても、1ペんで駄目になってしまう。1回打てば、定員が満たないわけですから、定員が満たないということは魅力がないということですね。ですから、絶対2次募集はしないような学校づくりをしっかりとやること、これが端的な私の方針でした。以上です。

（太田委員）

学校名を事務局が出してきたということは、当然魅力ある学校づくりという前提というか、基本的なコンセプトといいますか、それを持ってつくり上げていただいたと思うので、委員長にお願いしたいのは、その考え方をまず出していただきたいと思います。それともう1点、定時制についての原委員のご発言で、定時制に来る生徒たちはいろいろな経過を経て来ているということですので、その内訳が登校拒否の人たちとか、いろいろな範疇（はんちゅう）に分かれると思うので、そのうち訳が分かるのでしたら、これに関するデータを次回にいただきたいと思います。

（飯島委員長）

今の2つのデータをお願いします。

ほかにどうでしょうか、魅力づくりに関して。

（荻原委員）

皆さんのお話を聞いて、そのとおりだと思いますけれど、進学校、職業校、定時制それぞれ意義があるところがございますが、親として心配するのはその中間部分があるわけです。進学校にも行けない、職業科にも相当あきらめきれない、定時制には行きたくないというような、中間の部分がだいたい普通高と言われる部分であると思うのです。そういうところで、コース制を取って、田舎の高校では工夫していると思うんですけども、そこが一番どうやって魅力をコース制でつくっていくのかというのは、卒業生を見ても大学の推薦枠へ行く人、あるいは、専門学校へほとんど行くところ、そういったことを考えると、普通高自体をどうやって魅力ある、迷える子どもたちが行く学校をどうするのかと、前回もそうなんですけれども、中学を出たら、大変その進路状況といいますか悩むと、ところてん式ではないけれど、ランク別に割り振るという部分がどうしても出てくる、輪切りにする部分も出てくるわけなんですけれども、やはり子どもたちが一番多いのは、普通校の中間部分だと思うのです。その辺を、何とか道を見つけると、それが総合学科か、どうかは分かりませんが、1つの案ではないかと思っていますので、中間部分の子どもたちをどうやって引っ張り上げるかというのを、現場の先生方、あるいは教育委員会もやっていかないと、どうもそこが抜けてしまうと中ぶらりんになってしまうのではないかと、私は心配しておりますので、できる子はいい。言い方は悪いですけど中間の子を、どうするかというのを、現場の先生の意見を聞かせていただければなと思っています。

(中沢委員)

前回もこのような話があって、私はそのとき申し上げたのですが、やはり中学校側から、高校への進路を決めていくときに、その高校の目標とか特色ですね、これが明示、はっきりして生徒が分かる、この高校へ行けばこういうことができるのか、こんな勉強ができるのか、広く言えば部活動も頑張っているのか、そういうものがはっきり見える、これがやはりひとつの魅力につながっている。それじゃあ、おれは私はあの高校へ行ってこういうことがやっていきたいな、そういうものが見えてくる。そこら辺をはっきり出してもらう、またそういうことに努力してもらう、これが非常に大事だろうと思うんですね。

私も、校長会として、ついこの間も1度にはできませんので、順次それぞれの高校の状況について、義務と高校の両方が一緒になって会を持った中で発表してもらったり、あるいは高校を直接見せてもらったり、ということをして努めているんです。そういう中で、それぞれの学校がそれに向けて努力をしていることは分かります。また、より子どもたちがそれを理解するために、私どもの学校だと一斉にいろいろな学校から来てもらって教室にそれぞれの説明をする、言ってみればプレゼンテーションみたいなものを設けて、それで自分はここの高校のことを聞きたいな、親も一緒に来るのですね。ここの高校のことについてもっと知りたいな、選択をしてそこへ行って聞いてくる。

さらには、高校側ではもちろん体験入学とか、いろいろなことをやってもらっていますから、そこへ行ってまた参加してくる。ということで、はっきりここの高校はこういうことをやっているのか、こういう所が特色なのかということが分かってくる、それが分からせてもらうような努力もやはり魅力ある高校づくりにつながっていくだろう、まず第一歩だろうと思うんですね。さらにはその高校へ行ったら、なるほどそのとおりだったと、そして自分のその高校へ行った後の進路保障ができる、つながる、最終的にはそこだ思うのです。さらには新しいそこで学んだ喜びというのができる、そのようなことが、本当に魅力ある高校づくりにつながっていくのではないかなということを常に思っているところです。

(市川委員)

すみません、お願いします。

今、高校の出口のところがお話しにありましたが、職業科、普通科、出口を調べていただいて分かることは、どこも同じだということ、差がないということなんです。職業科を出ても普通科に出て普通科の職業就職先、普通科を出ても職業科の工業なら工業系ということなんです。そこで私は魅力ある高校づくりで1つ2つ心配で、今後少子化になっていく中でぜひとも考えなくてはいけないことが2つあるように思っています。

ひとつは教室の中で、黒板とチョークと生徒が少なければそれでいいかということなんです。ひとつの教室に生徒ができるだけ少なくいて、チョークがあって黒板があると、この教室で子どもが育つかどうかということなんです。これは、ますます少子化になるとどんどんどんどん進んでいって、それでいいのかどうか。個に応じた、少人数クラスができて、それでその子は幸せかどうか、これは少し間違いではないか、社会の中には大きな渦が、それなりの波が待ち構えております。出口の中では、この中で、もしそういう学校があるとするならば、第一に必要なのはネットワーク化、先ほどの、どなたかの委員さん

からのお話しからありましたように、地域には職業訓練校もありますし、専門学校もありますし、短大もあります。そうしたところ、地域のNPOでもあると思いますけれど、そうしたところでネットワーク、あるいは部分的に単位を取らせてもらえる、あるいは部分的にその施設を使わせていただける、どんどん学校の外に出て行くことができる、ますますこれからは必要なことではないかなと思います。

もうひとつは、ネットワーク化、多様化とありますが、もうひとつ多様性の問題なんです。今、子どもは非常に多様化しておりまして、中学では一律な内容をせざるを得ないわけですが、高校に行きましたらそれは一気に多様性に対応していかないと、生徒は一人一人、対応していただいているところがありますので非常に回復していくことが可能かなと思いますが、中学では高校入試というのを控えておりまして、非常に一律性が高いわけですが、これによって弊害が非常に出てきております。

しかし実際、子どもたちは非常に多様性を持っております。進学校だからいいということとは全くありません。これは大学の先生にお聞きしていただくと分かりますけれども、5人に1人は社会の出口ですでにつまずいております。進学しても、就職する場においてつまずいてしまいますわけです。そのくらい、一斉、あるいは一律教育の問題が出てきてそのまま引きこもり、ニートなんて言われているのが出ているひとつの現象があるのではないでしょう。

これからの若者が長野県にいったいどういう役割を果たしていくのかを考えたときに私は、減ったといっても中、高校中退が1,000人前後、毎年毎年いるわけです。この子どもはどこに行っちゃってるのか、どのような形で、社会、長野県に関連して生きていくのか、これを救わないといけない、ですから魅力ある高校というのは、ここに今のままでは駄目だということが最低言える点で魅力ある高校を、今も変えていたり、少しでも変えたと分かればそれでいいのです。それで魅力あるというふうに考えれば。それで変わるきっかけというのは、今しかないかなという気がするんです。それは少子化の危惧(きぐ)を非常に考えていращやると、高校再編を考えるということまでできております。ここでないと変わらないで、そのまま何が変わるのでしょうかと、教室の中にチョークと先生がいращやると、どんどん生徒は減っていく、この事情をどういうふうに変えていただけるのか。このような、大きな理想論ではなくて、まずひとつではないか。ひとつ成功例をつくらなければいけないと思います。

どんな形で出てくるのか、ひとつは総合学科とか多部制・単位制とか出てきているんですけれど、文部科学省の資料を見るといいというふうに書いてあるので、これをやってみようかと、こういうことではないのでしょうか。やってみないとこれはどうなるのでしょうかという心配はないのでしょうか。理想論はすごくあるんですけれども。私はひとつ、まず変化は怖いというふうにどこでもとらえられています。報道、新聞各種見ても、マイナス面に非常に気を取られていращやるわけですが、プラスの面は非常に薄く強調されているような気がします。

それはこの委員会に役目があると思うのです。議論はこの点をよく、本当にマイナスなのか、変化はいいのかというと、私は変化してもらっていいというとはえ方なのですが、変化は怖いというふうにとらえている。暗いもので嫌なものだととらえているんです。どんどん、このままでいいということで進んでいくわけですが、これは非常に怖い気がする

のです。

ですから変化のいい面を強調する、この委員会のひとつの役目というのは、そのよさ、あるいは改革推進プランの中で強調して、公開して、尽くして、どんどん訴えていく、ひとつの方法と思って、私はこの考えを述べさせていただけるので、非常にありがたいかなと思っております。

よろしくお願いいたします。

（西村委員）

私や原委員には耳の痛い話が結構多く出ているような感じがいたしますが、高校側も本当に努力をしています。努力をしています、大変申し訳ないのですが、PRが下手なんです。だから、ぜひPRを私どもはしていきたいと思います。またこういった形で14名の推進委員がいますけれど、私は大変よかったと思っているんですよ。それぞれの方々が、今の高校の現状を再認識していただいたと思っております、これはいいことです。そして東信地区からこういう高校をつくれる、こういう高校をつくっていきましょうよ、という意見が出れば私はこの推進委員会の一番のメリットと思っています。それが、ひいては高校の数だとか、学校をどうしようかとつながってくると思います。但し、こういった議論は、あまりずっと長く続くと、佐藤さんがおっしゃったとおり、どこかでクリアしなければいけません。けれども、ぜひこの議論はしていただきたい。高校側として出た意見は参考にしたいと思っています。

（飯島委員長）

ほかにどうでしょうか。

（小林委員）

ちょっと違いますが、先ほど、計画案どおりにしたときに、予算がどのくらいという資料は先ほどございました。そのときに、例えば高校の数はただ減るのではなしに、こんな高校にしたらいいいのではないかと、これも先ほどありました。施設設備、あるいは旋盤が古いだらうという話もありました。そういうようなことも夢というのですか、こういうふうにしたときにこの学校を、こんなふうにしていくのだというそれは何か、次回じゃなく次々回でもいいですけどもお願いしたいと思います。そう言いますのは、ここに委員としてもいらっしゃいますけれども、多分小諸高校に音楽科をつくったときには、相当の予算をつぎ込んだのではないかなと思うのです。

ただ、「こことここを合わせて、普通高校だからこのまま」というふうなお考えではないかと思います。多分予算が減るのではなくて、逆にいえば増える場合もあるのではないかなと思いますが、そこら辺も勘案して出していただければいいんじゃないかなと。ただ減る、減る。予算だけが削減されていいのだというふうには、私はとっていません。

以上です。

(飯島委員長)

この辺のところは大事なところだと思うのですね。減らしたから、ただ予算が減るということじゃなくて、いっときひょっとしたら、膨大に増えるかも、そのあと分かりませんが、それも含めて学科の改編資料をお願いいたします。

(宮阪委員)

先ほども推進委員を設置して議論をしていただきましたという形をとって、実施計画に移るということで中身はともあれ、次の実施計画に移ってしまうんじゃないかなという感じがとれたのです。それがひとつです。

もうひとつは総合学科なのですが、何を目指しているのかというのが分からないのです。イメージ的に言って今の実業高校とかからの転換ということでありますので総合職業高校というようなイメージになってしまうのかなという感じなのです。塩尻志学館では進学率は確かに高まっています。84%の生徒が進学しているということですが、これは普通科では駄目なのではないかという疑問なのです。この総合学科についてのメリット、デメリットについて考えた方がよいのではないかと思います。また塩尻志学館について、総合学科ということについての検証というのは十分された上で、全県に広めようとなったのか。今、確かに人気は高まったから広げようというような感じはあったかなと思いますが、そんなところです。

(飯島委員長)

保護者の立場での疑問です。

(篠原教育幹)

それではお答えいたします。

今回初めてでございますけれども高校教育課教育幹の篠原と申します。よろしくお願いします。

ただいま宮阪委員さんのほうから、2点ご質問があったかと思います。最初の点ですが、何はどうかあれ推進委員会の案を受けて高校教育委員会のほうが、ということですが、冒頭以来教育次長、また課長と話をしているとおりでございまして、やはりここでご議論をいただく。ご議論をいただく際に当然、特色というものを、ここでうまく掘り下げていただければ、この特色であれば私ども候補案として出してございます学校よりも、こちらの学校のほうがいいじゃないかといったお考えが当然出てきやすいだろうということは、はっきりと思っているところでございます。

そういう意味で特色へいきながら、さらにまた具体的なものをその学校に戻りながら、また特色にいきながらと。こういうふうな行き来をするという予測は私個人としては持っております。

それから2点目でございますけれども、志学館高校の件でご質問がございました。2つ大きくあったと思うのですが、1点目は総合学科というものの何がメリットとして多く上げられるかということでありまして。これは前回、私はこの会議に出ていなくて、前回総合学科についての議論があったとお聞きしていますので、重複する面もあるかと思い

ますけれども、やはり総合学科のもっとも利点というのはなかなか中学校までのところで、広く職業教育、もう少し具体的に言いますと、例えば世の中にどんな職業があるのか。自分の性格は、あるいは自分の技能というのはいったいどんな職業に向いているのか。

さらにその職業を選択していく場合に、具体的にどんな進路を取ったらその職業が可能になるのか、といったようなことを中学校までの間といえ、先ほど中学の先生からお話がありましたけれども、なかなか時間的な余裕も、ゆとりの問題もある。それから、もうひとつ発達段階の問題がどうしてもあるというふうに思います。やはり高校という最終的には大学に行くにしろ、就職をするにしろ社会というものに直接、面と向かわざるを得ないこの世代の者がやはりきちんと考える。そういう、いってみれば動機は非常に大きいものが出てくる。

そういう中で、やはり1年かけてきちんとそうしたものをカリキュラムに組んで、外部との連携をしながら勉強をしていく。こういう時間がいわゆるカリキュラムの中にきちんとあると。これは非常に大きなことでございます。経験的にももうすでに卒業生がたくさん出ております。そういう中でそういった声も聞こえています。そういう中で、2年次、3年次に多くの選択科目を置き、そしてその選択科目の中で自分の将来にとって大事な科目、これをもろろん基礎的な科目、英・数・国・理・社は大事ですけれども、それに加えて将来大学進学、あるいは就職、これに必要な科目を選んでいくと。「普通高校では可能ではないのか」というご質問がございましたけれども、これはいわゆる普通高校には選択科目の数、これを設定する限界はございます。

実は総合学科の高校は、普通高校と違いまして教員の配置がプラスしてございます。これは制度的にあるということでもあります。そうした中で、より多くの科目が設定できる。科目が設定できながら、より多くのきめ細かな進路に合わせた教育ということが可能になってくるということでもあります。

塩尻志学館高校でも卒業するとき総合学科について、いろいろな統計を取っております。いろいろな統計の中でひとつだけ、幾つか紹介したいと思いますけれども、例えば時間割は、これは塩尻志学館は240人おります。ほぼ簡単に言いますと240通りの時間割ができる。自分で時間割をつくる。実際には240通りじゃなくてもうちょっと少ないかもしれませんが、いずれにしても、一人一人が時間割をつくる。

そういう中でこんなふうな答えがあります。時間割についてということで、卒業時にアンケートを取ったものでは「確かな学力を身に付けることができた」こう答えている子どもたち。「当てはまる。大体当てはまる」これを含めると78.9%。約8割の卒業生が、いわゆる「確かな学力を身に付ける上で、この塩尻志学館の教育課程の編成、選択科目の多さ、これが役に立った」というふうに答えています。それからさらに「3年間の生活という項目。進路希望が実現できた」と、これが83.1%。つまり、2年次、3年次と考えながら、自分の進路希望、こんな進路希望ということをして1年次に入ったときからずっと積み上げながら、そのとおりになったということは、非常にこれは高い水準だと思えます。これは通常の、一般の今までの高校のイメージからいきますと、高い水準以上であろうと思っています。

こんなのでございますけれども以上でございます。

(飯島委員長)

はい。ありがとうございます。

(原 委員)

時間が押し迫っていますので手短に申し上げます。

市川委員から、いろいろご批判もいただいております。受け止めるべき点はもちろんあります。例えばチョークを使って黒板に向かってチョーク・アンド・トークの事例はもう駄目だというのは、これは十分何年も前から自戒しているわけです。ただ、委員のご指摘の中で、いかがかと思われる点を2点申し上げます。少人数の問題を、黒板やチョークと合わせて、これはもう駄目だという議論は、あまりにも乱暴ではないか。昨年末、国際学力到達度調査が大変注目を浴びました。その後の動きについて一切触れませんが、その中でとりわけ注目を浴びたのはフィンランドです。

これがまた、何かの機会があったら資料を取り寄せて勉強したいというぐらいの思いなのですが、20人以下ですよ。学級規模の17人ですよ。それから中退者が多いから改革という向きのご発言がありましたが、これも中退者の問題も重く受け止めております。しかし、市川委員は中学の先生ですからお話は中学、高校という青年期教育に携わっている方とすれば、少し不用意な発言ではないかというふうに思います。

もう1点、魅力にかかわって総合学科のご質問があり、そして、今、事務局からもお話がありましたが、総合学科の注目するところは「総合」という問題です。高校教育における総合制という問題を、総合学科はどこまでくみ取れるのか。あるいは総合選択制、あるいは総合何とかという、いろいろな名前が報告書にも載っています。その総合制をどう考えるかということです。

これは学校教育法をひもとくまでもなく、普通教育と専門教育を合わせて施すのです。それが、戦後の改革から60年近くたちますけれども、長野県の高校ではこれに成功してないわけです。そんな点においては総合制がどう生かされるかということで総合学科については、十分検証していく必要があるということです。

それからもう1点、これは次回で結構ですが、たまたま丸子実業が総合学科という候補にされているので、この場合事務局にこれを伺っておきたいのですが、丸子実業は学校内部の議論で総合学科転換というのを、数年前、志学館が発足する前後でしょうか、なさったというふうに聞いています。なぜか、とん挫したんですね。そして、今回は文書のように出てきたのですが、その丸実さんで、実現できなかったのはなぜか。これは、これからこの総合学科を考えていく上で大変重要な問題でありますので、次回にお話をいただきたい。

以上です。

(中沢委員)

今、先ほど塩尻志学館高校で総合学科のメリットについて説明がありました。その中で具体的に数字でも示されたのですが、中学校は確か卒業する時点で「将来、自分はどのような仕事がいいのか」ということについて、まだはっきり固まっていない。これは確かそういう生徒もかなりいると思います。やはり中学校、もっと言えば小学校から自分は将来

何になりたいのかという職業観。職業観というのをきちっと進路学習の中でやっていくということが義務教育の段階で大事だと思います。とはいえども、やはり揺れ動く子でも当然あって、中学校の段階でストレートに「じゃあ、私は工業科に行こうか」とか、あるいは「農業科へ行こう、行ってやろう」というところまで固まっていらない。そういう生徒も事実たくさんいる。

それを総合学科のほうでは、1年間じっくり職業観を学ばせながら、そしてさらに自分の進路について考えて最終的に選択幅の多い中で、自分のものが選ばれていく。その結果として、約8割の生徒が確かな学力が身に付いたとか、いろいろな進路についての希望がかなえられていくということがある。そういうことが出てきたと思うのです。そういう点で確か、意味がある総合学科だとは思いますが。中学校から見ても、魅力があると思います。そういう立場でいったならば、これもいろいろな予算的な面もあるのでしょうけれども、この2通にも地理的に見て非常に広い範囲ですから、すぐ変えると同時に実行ということは無理かもしれませんが、ゆくゆくは将来的にこことここに考えていくよというのが示されていくことが、より魅力あるものになってくるのだと思うのです。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

時計が、もう5分前を指してしまいました。

大変な議論をしていただきました。もう一度、この委員会の本来の姿に戻りつつあるということに感謝をしています。

最後に「魅力ある学校づくり」という形で議論を進めさせていただきました。佐藤委員のほうからありましたように、教育論になってしまいますと、本当にいろいろ出てきてしまいます。その中から、信州教育の中で何を魅力あるものにしていくか。もう一度、皆さんで、いろいろ資料をまとめながら議論を深めていきたいと思っています。

中高一貫教育という足元の方針が一番でした。今の最後の話だけを聞いておきますと、「じゃあ、中高一貫でやったらいいじゃないか」なんて言って、素人はすぐ考えることもできます。それと私の疑問ですけれども、県教委は高校を全入とするのか、あるいは今までどおり、選抜制にしていくのか。この辺も最後のところで、私は大きな問題になってこうと思います。

全入にするならば、適正配置をしていけばいいと。もうひとつ、先ほども委員の中から意見が出ていましたけれども、公立高校が数増えていった過程の中で、私立高校もやはりその中に参入してきております。これがどういう影響を及ぼしているのか、その私立高校は魅力ある運営をしているのか。そして、その高校の募集人員の推移はどうか。そして私立高校ですから、多分県外からも入ってきていると思います。その辺の割合はどうか。また、東信には2つ私立高校がありますけれども、通信制もあります。その辺のところのデータを、ひとつお出しいただきたいなと思っています。

最後の適正配置というところになりますと、やはりこれは避けて通れないような気がいたします。これは私の意見ですけれども、皆さんでそういったところでまた、十分ご議論いただければいいのですけれども、お願いしたいと思っています。

最後になりましたけれども、お手元に学校要覧が配布されています。前回までは、これ

はお預けして帰っていましたが、もし関係する高校のところがありましたら、抜き出して次回の委員会まで、この学校要覧を見ていただくのもよろしいのかなと、そんなことをあえて失礼ながら提案をさせていただきたいと思います。

時間になりましたから、今日はこれで終わりたいと思います。それでは次回の日程につきましてはどうでしょうか。

（植松主任教育支援主事）

まだ、確定ということではございませんが、次回につきましては大体めどとしまして、7月24日の日曜日辺りというようなところで調整させていただければと考えておりますのでご予約のほうを言っていただければと思います。

決定次第また、至急にご連絡させていただきたいと思います。ただいまそのような状況でございますが、いかがでしょうか。

（飯島委員長）

日曜でございます。

（西村委員）

次回から、すみません、もう一度進め方をお願いします。どういう進め方をするのか。それからもうひとつは、教育委員会に何を要望するのか、資料を。

（飯島委員長）

先ほど資料として要望したのは、経費の問題でございました。ちょっと、読み上げてください。

（植松主任教育支援主事）

経費の部分につきましての資料ということがひとつということでございます。

それから、定時制のことについてのデータをということもございましたので、それをご用意したいと思います。それから私立の2校のことにつきましても、データをご用意させていただきたいと思います。まだ落ちておりましたら少し確認をさせていただきたいと思います。

（太田委員）

よろしいですか。

この学校名が具体的に出てきている前提にある考え方については重要なところですので、ぜひ、お願いいたします。

（植松主任教育支援主事）

はい。分かりました。

（吉江高校教育課長）

すいません。少し補足させていただきます。

まず私学の関係はなるべくご用意させていただきたいと思っておりますが、それぞれの学校に、どの程度出せるかというのはありますので、確認させていただいた上だということを1点ご理解いただきたいと思います。

それから掛かる経費の関係も、できるだけ可能の限りお出ししたいと思っております。ただ、いろいろ難しい要素がありまして、とりわけ将来に対しての逆に所要経費みたいな面は非常に難しい要素はありますので、できるだけ用意をさせていただいて、それがご満足していただけない面もあろうかと思いますが、その辺はまた、次回にご指摘いただければと思いますのでよろしくお願いします。

（佐藤副委員長）

それでは、もう1点いいですか。

これから、適正配置の問題が出てくると思いますが、各高等学校の出身地域の生徒の流出流入の資料が欲しい。示された資料はかなり大ざっぱなんです。もっと細かにどういう流れの中で定員が充足されているのかとか、そういうのをみたいわけですね。具体的に言えば、地域校の生徒の生徒の資料が知りたい。

（西村委員）

学校要覧には出ていますから。

（佐藤副委員長）

どこから来ているのかとかですか。

（西村委員）

どこの中学か出ています、全部出ています。

（佐藤副委員長）

そうですね。じゃあ、いいです、それで。これを見れば出ているそうですが。

（吉江高校教育課長）

ただいま、西村委員さんからもお話がありましたように、要覧には一応出ていますが、少し整理して分かりやすい表ができるかどうか少しやってみたいと思いますので、よろしいですか。

（佐藤副委員長）

どう流入、どの村からどこの学校に行っているのか。どこから入っているのか。それをしっかり把握しないと適正配置はできません、議論はできませんということでもう少し細かく。次回間に合わなかったら次でも構いませんけれどもお願いします。

(中沢委員)

もう1点。お願いします。

この会場ですけれども1回目、2回目、3回目上田で会場をやっていますけれども、前も少し事務局からもあったように、佐久でもこれは可能ではないかなと。そういうことによつて、やはり傍聴に来る方も変わってくるじゃないかと。

ぜひ、今度はそこを解決してもらいたいと思うのです。

(飯島委員長)

はい。事務局。

(植松主任教育支援主事)

ええ。その辺も十分配慮をいたしまして、佐久のほうも考えていきたいと思っております。そんなところでよろしくお願いしたいと思います。

(原 委員)

1点。前回は申し上げましたが、8月まで調査するわけですから、8月の見通しも出していただけるとありがたいです。

(植松主任教育支援主事)

その辺につきましては、こちらのほうでも少しお時間をいただきまして、お知らせするときに可能であれば8月のところまでお知らせできれば、そんな形でと考えていきたいと思ひます。

(飯島委員長)

では、みんな希望ということで、事務局で考えてみてください。

それでは次回、多少、今回の続きで資料をいただいたところで魅力ある学校づくりという問題でもう少し議論は進むとは思ひます。また、事務局と、相談しながら今後の進行の方向を考えたいと思ひています。

それでは時間となりました。終わらせていただきます。ご苦労さまでございました。